

寄稿論文

多文化の背景を持つ子どもたちの育ち・キャリア

—群馬県大泉町からの報告をもとに地域支援を考える—

キーワード

外国につながる子ども, 集住地域, コミュニティ

内田千春

1. 近所に住む隣人である多文化の背景を持つ家族と子どもたち

外国人人口の都道府県別順位と、学齢期の外国籍児童の数は一致していない。どの国からどのような理由で来た人たちが多いのかによって、家族で生活している人たちが多い地域と、単身で生活している人が多い地域がある。0～6歳の子どもの人口で見ると図1のような状況にある。

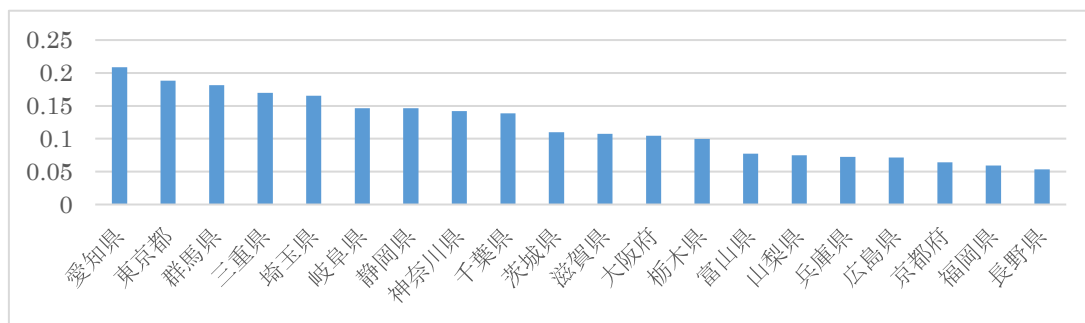


図1. 2020年12月時点の0～6歳の外国人人口の都道府県別人口に占める割合の多い順20位まで (%) (出入国在留管理庁統計より筆者作成)

また、総数ではなく自治体の人口に占める外国人の割合をみると、表1のように群馬県大泉町や北海道占冠村、大阪市生野区や波速区の方が、新宿区よりも外国人の割合が多い。この数には、日本国籍を持つ外国ルーツの人たちは含まれないため、実際にはさらに多くの多文化の背景を持つ人たちがこれらの地域で生活しているだろう。群馬県大泉町は、2021年1月1日現在、生活者である外国人の割合が18.8%を超えており、日本で1, 2位を争う外国人集住地域である。

こうした傾向が長く続いている集住地域では、外国人の子どもの課題が様々な場面で顕在化する。家庭の事情で小中学校に行かなくなったり学校での居場所ができずに通学を止めたりする子ども、高校の入学試験がハードルになり高校に行かない子ども、高校には入っても中退する子どもなどがある。さらに就職することができても、文化的障壁や受け入れる職場での人間関係に悩むなどして転職を重ねる若者もいる。このような子どもたちが、教育を受ける権利を十分に保障され、未来の希望に向けてそれぞれの生活基盤を持ちキャリアを築いていくために、地域で何ができるのか。

表1. 2021年1月1日現在 住民基本台帳から算出した生活者である外国人の割合
(筆者作成)

令和3年1月1日現在 住民基本台帳から算出 (生活者である外国人の割合)								
大阪府	大阪市生野区	21.75	大阪府	大阪市東成区	8.68	愛知県	知立市	7.11
群馬県	邑楽郡大泉町	18.84	三重県	桑名郡木曾岬町	8.47	沖縄県	国頭郡恩納村	7.01
北海道	勇払郡占冠村	16.96	大阪府	大阪市中央区	8.46	神奈川県	愛甲郡	6.93
大阪府	大阪市浪速区	13.17	東京都	荒川区	8.43	岐阜県	加茂郡坂祝町	6.69
東京都	新宿区	10.96	愛知県	海部郡飛島村	7.93	長野県	南佐久郡川上村	6.54
神奈川県	横浜市中区	10.82	愛知県	高浜市	7.89	愛知県	小牧市	6.51
愛知県	名古屋市中区	10.56	岐阜県	可児市	7.72	愛知県	名古屋市港区	6.49
埼玉県	蕨市	9.92	静岡県	菊川市	7.46	埼玉県	川口市	6.41
大阪府	大阪市西成区	9.49	愛知県	碧南市	7.41	東京都	福生市	6.35
兵庫県	神戸市中央区	9.32	神奈川県	愛甲郡愛川町	7.39	東京都	北区	6.31
東京都	豊島区	9.21	兵庫県	神戸市長田区	7.26	群馬県	伊勢崎市	6.28
岐阜県	美濃加茂市	9.19	東京都	台東区	7.26	三重県	伊賀市	6.18
北海道	余市郡赤井川村	9.10	東京都	港区	7.23	山梨県	中央市	6.14
長野県	南佐久郡南牧村	8.89	北海道	虻田郡留寿都村	7.17	滋賀県	湖南市	6.04
茨城県	常総市	8.84	神奈川県	川崎市川崎区	7.14	北海道	虻田郡ニセコ町	5.98

そのヒントを探すべく下記のような大会パネルを企画した。

2. 子日研第4回大会パネルの紹介

子どもの日本語教育研究会には様々な立場から、外国につながる子どもたちの言語支援を通して、一人一人の子どもの自己実現とウェル・ビーイングを支えようとする人たちが集まっている。2021年3月6日に実施された第6回大会のパネル企画では、乳幼児期から青年期までのつながりの中で子どもの育ちを捉える視点を持ち込み、生涯発達という長い目で考えた時、地域がどう変わっていかねばならないかを問うことにした。そのために、外国人集住地域及びその近郊で保育士・教員養成に携わってきた大学教員の視点と群馬県大泉町で放課後学習支援を運営するNPO法人の運営者という視点を持つ、岡本拓子さん(高崎健康福祉大学)と佐々木由美子さん(足利短期大学)にご報告をいただいた。その際、岡本さんからは、行政とタッグを組んだ大泉町での包括的な調査結果と、放課後支援教室から見た子どもたちの現状を、また佐々木さんからは、教え子でもある外国ルーツの保育者に関する研究を通して異文化環境でのキャリア形成の難しさや、多文化共生を目指すべき保育現場が持つ課題についてお話いただいた。そして、山形県で地域支援に携わってきた内海由美子さん(山形大学)が指定討論として、これからの支援に必要な視点を俯瞰的に整理し、地域支援のあり方についてご提案いただいた。

3. 本報告の構成と意図

上記のパネルを踏まえて、本報告では、岡本拓子さんからは、「大泉町における学齢期の外国人児童に対する支援—学習支援・居場所はなぜ必要か—」と題して、高崎健康福祉大学と大泉町の共同研究プロジェクトとして実施された「大泉町子どもの生活・実態調査第2回」

(2019年実施)の調査の第一次分析の結果を保護者の状況を中心に報告していただいている。この調査は町内全域の小中学校の児童とその保護者を対象としており、各学校を通して質問紙を配布し、回収率が児童生徒90.8%、保護者が61.2%と高い。保護者への質問で両親またはどちらか一方が日本国籍以外と回答した363人の状況のデータからは、外国人世帯の経済的困窮の程度が示されている。

また、生活・学習サロン Study Spot の活動から見えている学齢期の外国人児童の課題を実践者としての立場から整理・報告していただいている。今回の実態調査でも明らかになっている経済的な課題に加えて、複雑な家庭環境や保護者が抱えている問題が子どもたちに影響していること、将来へのビジョンが持ちにくい状況にあることが報告されている。こうした状況の中で、Study Spot で解決することができなかった事例について率直に報告していただいている。他の地域の事例と比較検討し、今後の展開を考える材料になる報告をいただいたと考えている。

佐々木由美子さんからは、「外国人保育士のキャリア形成一周辺化されている自分から当事者としての自分へ」と題し、外国人保育士として群馬県で就職しキャリアを築き始めた方の保育士として、また一人の人間としての成長過程を報告していただいた。この報告は、佐々木さんの学位論文の一部を、今回の報告のために整理し直していただいたものである。また、報告事例として登場する方は、佐々木さんがそのキャリア発達を支援しようと継続的に関わり続けて来た方でもある。社会に出てから改めてアイデンティティを形成し直していくプロセスに佐々木さんが丁寧に立ち会い支えて来られたのだろうと思う。そうした信頼関係の中で初めて見えにくい外国人保育者としてのストーリーが見える化された貴重な研究成果を紹介していただいた。この報告を通して外国人として日本の園に就職しそこで働いていくというのはどういうことなのか、また異文化環境でキャリアを築いていく難しさがどこにあるのかの一端を、私たちは学ぶことができる。

内海由美子さんには、大泉町で起きていることを俯瞰的に捉えた上で、他の地域でも共通する課題として考え、全国で起きている様々な課題を整理していただいた。その上で、内海さんが活動する山形市での支援活動を参照しながら、切れ目のない支援や見守りができる地域の体制づくり、「顔の見える体制づくり」の重要性について議論されている。内海さんの視座が加わることで、集住地域である大泉町の報告を、他の地域での実践につなげることができると考えている。

私自身、3人のパネリストの報告を自分がかかわっている地域と比較し、次に自分は何ができるのか、どのようなリソースを探していくべきかを考えることができた。多文化の背景を持つ子どもの教育に対する認識不足による規則や体制の不備などといった環境要因によって、子どもの教育を受ける権利、幸せを目指す権利が疎外される状況を早く改善しなければならない。そのために、産前産後の時期からの支援につなげるにはどのような体制が必要なのか。持続可能性のあるネットワークを構築するにはどうしたらよいか。内海さんは「学校間、地域間で支援に格差が生じ、個人任せであるため支援の経験は蓄積されず共有されてこなかった。」と指摘している。このパネル報告により大泉町や山形市の経験が共有され、このジャーナルを読む支援コミュニティの蓄積となり、各地域の取り組みにつながることを願っている。

(東洋大学)